川崎ジュニア文化大賞受賞作品

「だれかの中で使う時間」

宮前平小学校　６年　小出　美有

私には「ねえね」と呼んでいる大切な人がいます。私の姉ではなく、私の母の一つちがいの姉です。本当は、おばさんと呼ぶべきなのかもしれませんが、小さい頃から、ずっと彼女のことを「ねえね」と呼んでいて、なぜかその呼び方が私の中で一番しっくりくるような感じがするのです。

私の母の故郷、滋賀県に住む彼女と出会う回数は本当に少なく、平均すると一年で二十日です。そのうちの十四日は夏休み、残りの数日がお正月と春休みです。小さい頃から私は、滋賀での生活がとても楽しみで、特に広いプールで伸び伸び泳げるのがうれしくて連日通っていました。また万灯祭や灯ろう流しなど地元の夏祭りを見ると、とてものどかで幸せな気持ちになりました。けれど何より楽しいのは、夏休みの宿題を滋賀ですることでした。私は勉強が得意でもなく、また大好きではありません。けれど、漢字ドリルや算数のドリルを、彼女と一緒にしていると勉強がそれほどきらいではなくなるのです。

彼女のことを、私はいつしか不思議に思うようになりました。きっと何年か前まではずっと仕事に行っていたように思うのですが、今はいつ出会っても家にいるので、仕事には行っていないと思います。その理由を直接聞くことはしませんが、きっと心の病気のせいだろうと、だんだん感じるようになりました。彼女は食事の後に、いくつもの種類の薬を飲んでいます。何より、家の外には出ません。けれど私や私の弟、妹、両親と会話する時、自然のままで、何もい和感がありません。ただ口ちょうは、

「薬の副作用で手に力が入らないから、文字が上手に書けなくてごめんね。ミミズみたいになっちゃったけれど、これ読める」

と言いながら、小さな小さな文字をものすごいスピードで書きます。一緒に机に向かい合いながら勉強をしていると、時々、

「充電切れで体力の限界だから、少し休むけれどごめんね」

と言いながら、近くにある布団に横になることもあります。その少しが十五分の時や、三時間の時もありますが、

「復活した」

と急に明るい表情で再び勉強に取り組んだり、急にきびしくおこった表情になって、涙ぐんでいることもあります。そんな時私は、ねえねには、きっと私に聞こえない声がどこからか聞こえてきて、苦しんでいるのだろう、と考えるようになりました。どんな言葉をかければ良いのか思い浮かばないほどの、とても悲しい表情をするからです。ただ私には、何も聞こえません。彼女が苦しんでいる理由を全く理解できないまま、しばらく時が流れます。しばらくすると彼女は、落ち着いたのか、以前より優しい表情の「ねえね」に戻り、話し方もまるで私の友達のようになります。

私が勉強でわからないことがあると、どれほどつまらない質問をしても、おこらず必ず何でも答えてくれます。例えば昼間に一緒にドリルをすると、「それ、課題やで」と言いながら、次の日には、ドリルで答えを間ちがった苦手な問題だけがパソコンで編集されて、テスト用紙が作成されているのです。私にとって、学校や塾よりもきびしい時間です。

私は、もっと近いきょりに彼女がいたら、私も同じように勉強が好きになるのだろうか、と時々思います。彼女が、小学生の頃、小学校の校舎の裏山に、トトロの坂と呼んでいる場所があってその坂を段ボールをお尻の下にしきながら、ものすごいスピードですべるのが大好きだったと聞いたことがありました。けれどすべる時に勢いをつけすぎて、毎日のようにズボンをまさつで破り、親にしかられていたとも聞きました。そんなに元気だった彼女を病気にした原因が何なのかは分からないけれど、一緒にいて感じることは、私の周りの友達の中では一度も出会ったことのないほど、ものすごく真面目で一生懸命で、何より彼女は勉強が好きな人間な

のだということです。体調がすぐれない中で、少しでも元気な時間があると机に向かい、様々なジャンルの本を読んでいます。そして、私と一緒に過ごす時間は、私のためだけに精一杯のことをしてくれます。

もしも、彼女が病気でなかったら、どんな人生を過ごしていたのだろうかとふと考えます。そして将来は、もっと医学が発達して、こうした心の病気が治せるようになればいいのにといつも思います。心の傷は、中身が見えません。傷の深さも痛みも、理解するのが難しいけれど、あふれる優しさは確実に伝わります。私のためにこんなに自分の時間を使ってくれた彼女に感謝しながら、次は将来私もだれかのために時間を使えるようにしようと考えています。だれかの中で使う時間の大切さを、彼女から学んだからです。